

平和文化



公益財団法人 広島平和文化センター

題字 松井一實 会長

ローマ教皇が記したメッセージと広島市に贈られた燭台を展示

ローマ教皇フランシスコは2019年（令和元年）11月24日（日）、ヨハネ・パウロ2世以来38年ぶりに広島市を訪れ、平和記念公園で開催された「平和のための集い」に参加し、原爆死没者慰霊碑（広島平和都市記念碑）に献花した後、被爆者の梶本淑子さんと細川浩史さん（欠席のため代読）の証言に耳を傾けました。

梶本さんは爆心地から約2.3km離れた動員先の工場で被爆しました。倒壊した建物の下敷きとなり大けがを負ったことや火傷を負って皮膚が垂れ下がり避難していく人々の悲惨な光景、被爆から1年半後に亡くなった父親のことなどを語りました。

細川さんは爆心地から1.3kmのビルの4階で被爆しました。原爆により最愛の妹を失い、自身も原爆症の再発に怯えながら過ごしてきたことや、被爆者の使命として「次世代にヒロシマを伝承する」ことをメッセージとして訴えました。

その後、ローマ教皇が平和へ向けたスピーチを行い、広島原爆投下によるすべての犠牲者を記憶にとどめ、被爆者の強さと誇りに深い敬意を表すると述べました。また「戦争のために原子力を使用することは現代において犯罪以外の何ものでもない」「核兵器を保有することもまた倫理に反する」と訴え、世界中の人に「戦争はもういない」と声を合わせて表明することを呼び掛けました。

広島平和記念資料館では12月27日（金）から東館1階でローマ教皇が平和記念公園を訪問した時に記した



ローマ教皇フランシスコ（広島市撮影）

メッセージと明かりを灯したキャンドル、燭台を展示しています。

メッセージには、「わたしは平和の巡礼者として、この地の歴史の中にあるあの悲惨な日に、傷と死を被ったすべての人との連帯をもって悼むために参りました。いのちの神が、（わたしたちの）心を、平和と、和解と、兄弟愛へと変えてくださるよう祈ります。」と記されています。

燭台は「平和のための集い」の時に原爆死没者慰霊碑前に置かれたものです。高さ1.15mの真鍮製で、その上にキャンドルが置かれ、ローマ教皇が明かりを灯しました。

展示を通して、ローマ教皇の平和への強い思いに触れ、世界中の人たちが力を合わせて平和な世界をつくる必要があることをあらためて考えていただきたいと思います。

（平和記念資料館 学芸課、啓発課）

目次

ローマ教皇が記したメッセージと広島市に贈られた燭台を展示	①
国際フェスタ2019	②
平和首長会議国内加盟都市会議総会開催／ 日本政府に対し核兵器廃絶に向けた取組の推進を求める要請文提出	③
平和首長会議理事会出席（ハノーバー市）／ 小泉事務総長がジュネーブ市で国連・各国政府関係者と面談	④
被爆体験記「ヒロシマを生き延びて」（切明千恵子）	⑤
ヒロシマ・ピースフォーラム開催／ヒロシマ平和行政実務者研修開催	⑥
ユースピースボランティアが活動開始／子どもたちによる「平和なまち」絵画コンテスト／ 平和首長会議海外加盟都市インターンを受け入れ	⑦
「広島・長崎講座」開設大学支援／「アジア太平洋地域リーダーズプログラム」出席	

「国家が崩壊するとき：チャウシェク政権崩壊を事例として」（福井康人）	⑧
資料調査研究会研究発表会開催	⑩
企画展「海外収集資料から見る広島原爆被害と復興」／ 収蔵資料紹介「レプリカー遺品の語り部」／本館「市民が描いた原爆の絵」展示入替／ 「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」実施	⑫
ウェブ会議システムによる海外への被爆体験証言／英語で伝えようヒロシマセミナー	⑬
令和2年度被爆体験伝承者派遣申込みの受付開始／ 姉妹・友好都市の日記念イベント（モンリオールの日、重慶の日、ホルホルの日）	⑭
「世界を知ろう!」「Have a Natter!」開催	⑮
JICAサロン「バヌアツ共和国」／ヒロシマ・メッセンジャー決定／ 多言語生活情報サイト「外国人市民のみなさんへ」	⑯



国際フェスタ 2019

～ひらこう世界のとびら であおう世界のなかま～

国際フェスタ 2019 は令和元年 11 月 17 日（日）、広島国際会議場、平和大通り緑地帯などを会場に、第 20 回の節目と広島国際会議場開館 30 周年を記念し、会場に国際会議場大ホールのフェニックスホールを加えて規模を拡大して開催しました。

広島市や近郊で国際交流、国際協力活動をしている市民団体や企業 76 団体が、異文化理解や地球環境への配慮、多文化共生、日本文化体験など 40 の多彩な事業を催し、延べ約 16,300 人と過去最高の来場者数となりました。（主催一本財団。共催一独立行政法人国際協力機構中国センター、公益財団法人ひろしま国際センター、広島市）

オープニングセレモニーでは、前年に引き続き、安田女子大学文学部書道学科の学生による書道パフォーマンスが披露されました。国際フェスタのキャッチコピー「であおう世界のなかま」を力強く書き上げると、参加者から大きな拍手が起こりました。

野口健さんトークショー

～未来と世界の広げ方～ 落ちこぼれだった僕の場合

ゲストスピーカーに、アルピニストの野口健さんを迎え、ヒマラヤや富士山での環境問題へのご自身の関わりや、JICA 海外協力隊員ら、現地で生き生きと暮らす日本人たちについて語っていただきました。

参加者は時折、野口さんの軽妙なトークに、笑いも混じりながら、普段聞けない話に耳を傾け、最後まで聞き入っていました。

トークショーの参加者からは、「受け身で得た情報だけでなく、実際に自分の目で世界を見ることの重要性について知ることができた。」といった感想が寄せられました。



野口健さん

世界の音楽と舞踊

～大地のビート、躍動のリズム～

20 回記念イベントとして、フェニックスホールで世界の音楽やダンスのステージイベントを行いました。バリ・ガムラン（鉄琴）と舞踊「バパン・サリ」による「インドネシア・バリ島の伝統音楽ガムランと舞踊」、広島韓国伝統芸術院による「韓国伝統芸能のしらべ」、広島朝鮮学園中高級部舞踊部、民族器楽部

による「統一アリラン」、Obaaba Dance & Drum Group と愉快的仲間達による「本場アフリカンパワーを体験せよ!」、サンバ連合ホーザ・ジ・ヒロシマによる「サンバ」、エル・コ



世界の音楽と舞踊

ンボ・デ・ラ・パスによる「情熱のラテン&サルサビート」の、6つのグループによるアジア、アフリカ、中南米をテーマとした本格的なパフォーマンスが披露されました。

ファイナレでは、20 回連続参加の 10 団体に登壇していただき、小泉 崇 本財団理事長から感謝状を贈呈しました。

国際交流・協力活動の紹介

市民団体等活動紹介コーナーでは 20 団体が活動の紹介ブースを設け、それぞれの国際交流・協力活動について紹介しました。このほかにも、公的団体や市民団体、NGO、大学生、企業などがブースを設け、参加者は興味のあるブースを回り、交流を深めていました。特に今年は、総務省や安芸高田市国際交流協会などが新規参加し、近年クローズアップされている「多文化共生」に関する取組を紹介しました。

外国文化・日本文化の紹介と体験

外国文化の体験では、スコットランド民族衣装のタータン模様のデザイン作りやケルト結び体験、中国の切り絵体験、中国結び（中国式組み紐）体験のコーナーを催し、日本伝統文化の体験では、着物の着付けや茶道、いけばな、書道などのコーナーを催しました。外国人も日本人も、各国に伝わる文化を興味深く体験していました。

世界の料理と民芸品バザー

国際会議場南側の平和大通り緑地帯では、「ひろしま国際村 世界の屋台」と称し、19 団体が世界の様々な料理を販売しました。また、「国際協力バザー」会場には 13 団体が参加し、各国の民芸品などを販売しました。

このほか、世界のこどもたちが「平和なまち」をテーマに描いた絵画コンテストの受賞作品の展示や、留学生の発表会、大人から子どもまで異文化体験を楽しむ「地球ひろば」、クラフト体験をしながら広島市の姉妹・友好都市について学べるコーナー、世界の舞踏や音楽を披露する屋外ステージ、世界のコインを寄贈し開発途上国の子どもたちを支援するコーナー、イベ

ント会場を回ってクイズに答えるとプレゼントがもらえるクイズラリーなど、各会場は大いに賑わい、参加者は、国際交流、国際協力について、理解を深めていました。

また、このイベントには、多くの市民や留学生がボランティアスタッフとして参加し、一緒に盛り上げていただきました。

参加した外国人も日本人も、世界各国の文化に触れる一日となりました。

(国際交流・協力課)

平和首長会議国内加盟都市会議総会を開催

昨年10月24日(木)、25日(金)に、第9回目となる平和首長会議国内加盟都市会議総会を、東京都国立市において開催しました。

この会議は、平和首長会議の国内における取組の充実を図るため毎年開催しており、今回は全国から83自治体・147人(うち首長37人)が出席しました。

平和首長会議会長が挨拶

平和首長会議会長の松井一實広島市長は開会挨拶において、「核兵器や戦争のない状態にしていくために、都市としてできることには制約があるが、平和の実現に向けての志を同じくする自治体と一緒に声を上げ、それを国家にしっかりと受け止めてもらうような環境を作っていくことは可能だと考える」と述べた上で、「市民の代表である首長で構成される我々平和首長会議は、被爆体験が広島・長崎のものだけに留められるのではなく、広く市民社会のものとして共有され、核兵器廃絶と世界恒久平和の実現に向けた取組が推進されるようにしていかなければならない」と決意を表明しました。

国立市民もプログラムに参加

次に、国立市プログラム「ピース フロム 国立」が行われ、自治体参加者に加え多くの国立市民が参加しました。国立音楽大学附属高等学校生徒による演奏、国立市PR動画放映、国立市の平和の取組発表、くにたち原爆・戦争体験伝承者講話、くにたち平和組曲合唱、青少年「平和と交流」支援事業(HIROSHIMA and PEACE)国立市参加者による報告等が行われました。

平和に関する取組事例を報告

会議における最初のプログラムとして、泉房穂兵庫県明石市長から太平洋戦全国空爆犠牲者慰霊協会について、安田守京都府向日市長から向日市の平和に関

する取組事例の報告がありました。

次に、平和首長会議事務局からメンバーシップ納付金平成30年度決算や未加盟自治体への加盟要請、東京オリンピック・パラリンピックに

向けて実施する平和の取組、第10回平和首長会議総会の概要について報告を行うとともに、平和首長会議の小泉崇事務総長(本財団理事長)が世界情勢と平和首長会議の取組について報告しました。

続いて、日本政府に対する核兵器廃絶に向けた取組の推進についての要請文の提出について審議し、了承を得ました。

最後に、会議の概要等を盛り込んだ総括文書を採択し、平和首長会議副会長の田上富久長崎市長が挨拶され、閉会しました。

(平和連帯推進課)



第9回平和首長会議国内加盟都市会議総会で議事進行する松井広島市長(左)と田上長崎市長(右)

日本政府に対し核兵器廃絶に向けた取組の推進を求める要請文を提出

総会での決定に基づき、昨年11月28日(木)に、松井市長、開催地市長の永見理夫国立市長、長崎市長代理の光武恒人長崎市長が外務省



左手前から光武長崎市東京事務所長、永見国立市長、松井広島市長、中山外務大臣政務官

を訪問し、核兵器廃絶に向けた取組の推進について安倍晋三内閣総理大臣宛ての要請文を中山展宏外務大臣政務官へ提出しました。

同政務官は「平和首長会議国内加盟都市の思いをしっかりと受け止めたい。核兵器国と非核兵器国の橋渡しに努める日本政府と、核兵器廃絶というゴールは共有していると思っている。ローマ教皇の広島・長崎訪問は、世界に向け、平和への思いを認識いただけるまたとない機会となり、お迎えいただいたことに感謝申し上げたい。政府としても、核を巡り国際的に不安定な状況の中、透明性をはじめとした具体的な取組を続けていきたい。」と述べられました。

(平和連帯推進課)

平和首長会議理事会に出席（ドイツ・ハノーバー市）

平和首長会議（会長 松井一實^{まつい かずみ}広島市長）の第11回理事会が、昨年11月11日から2日間にわたり、副会長都市であるドイツ・ハノーバー市^{こいづみたちし}において開催され、松井会長及び小泉^{こいづみたちし}事務総長（本財団理事長）を始め、ヨーロッパ、北米、アジアから役員都市10都市の関係者が出席しました。

次期ビジョンの基本的方向性について合意

松井会長は冒頭挨拶において、これまでに構築してきたネットワークを強化するために加盟都市を拡大し、特に核保有国とその同盟国において市民の



理事会に参加した役員都市関係者

平和意識の醸成を図ることにより、為政者の政策転換を促していくことが必要であると述べました。

まず、2020ビジョンの達成状況や現行動計画の取組状況について議論し、2020ビジョンの下で、多くの加盟都市が平和NGO等とともに核軍縮の進展に向けて主体的な活動を展開してきたことを確認しました。

続いて、2021年以降の次期ビジョン・行動計画をどのように策定すべきかについて議論しました。

次期ビジョンの基本的な方向性については、「核兵器のない世界の実現」を中心に据え、同時に「安全で活力のある都市の実現」を目標として掲げ、さらに市民一人ひとりが日常生活の中で平和について考え、行動することを奨励する理念を示す「平和文化の復興」を掲げることで合意しました。また、2020年8月の第10回平和首長会議総会での策定に向け、引き続き議論を深めていくことにしました。

その後、英国・マンチェスター市から「被爆樹木を活用した平和教育」について、フィリピン・モンテルパ市から「国際平和デーにあわせた平和意識啓発イベント」について、ハノーバー市から「リーダー都市による加盟要請等の活動」について、効果を上げていく取組が報告されました。

また、次期ビジョン・行動計画への移行を円滑かつ着実に進めることができるよう、2020ビジョンの最終年である2020年に重点的に取り組む事項について議論し、「『核兵器禁止条約』の発効等の目標の達成に向けた加盟都市の拡大」、「次代を担う若い世代の意識啓発を目指す平和教育の実施」、「広島・長崎への受け

入れを組み込んだ青少年『平和と交流』支援事業等の充実」の3項目を決定しました。

ヨーロッパ支部設立を承認

以上のことに加え、スペイン・グラナダ市を中心としたヨーロッパの役員都市から、2020年1月のヨーロッパ支部設立について提案があり、これを承認しました。

また事務局から、2020年に計画している取組として、東京オリンピック・パラリンピックの開催に向けて同組織委員会が進めている「PEACE ORIZURU」（折鶴に平和メッセージを書いてSNSで発信する）プロジェクトへの参画や、2020年NPT（核兵器不拡散条約）再検討会議に際して行う各種の活動について説明しました。

2日目の会議では、前日の議論を踏まえて、今回の理事会を取りまとめる総括文書について審議し、採択を行いました。

また、前日のヨーロッパ支部設立の承認を受けて、ヨーロッパの役員都市が初めて設立準備会議を行うのに際し、松井会長は冒頭で、リーダー都市が中心になって平和な世界の実現に向けて協働していくことは非常に意義深いことであり、ヨーロッパ地域のみならず世界の平和構築に向けて連帯してほしいと期待を述べました。

平和首長会議は、今後もこれまで培ってきたネットワークを強化し、取組を広げるべく、核保有国とその同盟国を含む全世界で加盟都市を増やし、市民社会に平和への大きな潮流を作ることにより、核兵器のない世界の実現に向けて為政者の政策転換を強力に後押しする環境づくりを推進していきたいと考えています。

（平和首長会議・2020ビジョン推進課）

小泉事務総長がスイス・ジュネーブ市で国連・各国政府関係者等と面談

平和首長会議の小泉^{こいづみたちし}事務総長（本財団理事長）は、第11回平和首長会議理事会出席のためのヨーロッパ訪問の機会を捉え、スイス・ジュネーブ市を訪問しました。国連、各国政府関係者等と面談し、被爆75周年を迎えるとともにNPT（核兵器不拡散条約）再検討会議が開催されるなど大きな節目となる2020年を前に、平和首長会議の取組に対する理解と協力を求めました。

NPT再検討会議や核兵器禁止条約への尽力を要請

まず、ホワイト在ジュネーブ国際機関コスタリカ政府代表部大使と面談した小泉事務総長は、2015年の再検討会議が頓挫した原因となった中東における混乱と同様な状況にあるが、市民社会の見方からすれば

イランには1,000を超える平和首長会議の加盟都市があり、悲観的な状況ばかりではないとの考えを示し、2020年NPT再検討会議の成功や核兵器禁止条約の発効に向けて、尽力していただくことを期待すると述べました。

続いて面談したローワン赤十字国際委員会(ICRC)武力関連法務部長は、米・ロの中距離核戦力(INF)全廃条約の破棄などについて、核兵器を法的に規制できなくなっていくことを危惧されており、その意味で核兵器禁止条約は希望だと発言されました。また、核兵器は都市が標的になるという点で、世界の都市で構成する平和首長会議の活動は大変重要であると述べられました。

小泉事務総長は、引き続き平和首長会議の取組に協力していただくよう依頼しました。

その後、ボリー国連軍縮研究所(UNIDIR)研究部長と面談した小泉事務総長は、市民社会、国際機関、NGOが連携して核兵器廃絶に取り組んでいくことが重要だと述べました。

ボリー部長は、NPTが2020年で50周年を迎えるが、核軍縮はとてつもない情勢にあり、核兵器禁止条約についても、核保有国と非核保有国の分断を生んでいるとの現状を述べられ、こうした状況にあるからこそ市民社会が核軍縮への圧力を掛けていくことが重要だと発言されました。

2020年オリンピックを機に核廃絶を訴え

バロバヤ国連欧州本部長と面談した小泉事務総長は、国連の持続可能な開発目標(SDGs)が平和首長会議の目的にも合致すると述べるとともに、2020年の第10回平和首長会議総会や東京オリンピック・パラリンピックなどの機会を活用し、世界中に核兵器廃絶を訴えていきたいと話しました。

バロバヤ本部長は、被爆75周年に当たる2020年が、平和首長会議にとって重要な年であることを認識され、大いにサポートしていきたいと発言されました。また、広島・長崎での出来事を青少年に伝えていくことが重要だと述べられました。

続いて面談した高見澤軍縮会議日本政府代表部特命全権大使は、2019年も国連総会第一委員会において日本が提案した核兵器廃絶決議案が採択されたことに言及し、2020年NPT再検討会議を成功に導くため、これまでの決議を踏襲するのではなく新たなものにしたと説明されました。

さらに面談したフィン核兵器廃絶国際キャンペーン(ICAN)事務局長は、平和首長会議との連携に対して謝意を述べるとともに、平和首長会議が核兵器廃絶に向けて市民の安心・安全を守るという視点に立ってアプローチしていることから大きな示唆を得て、ICANシティーズ・アピール(核兵器禁止条約を批准していない国の地方自治体が自国政府へ条約締結を呼

び掛ける取組)を始めたと言われました。

今回面談した方々は共通して、核兵器廃絶に向けて市民社会が果たす役割が大変重要だと考えておられました。こうした考え方は、市民社会における平和意識を醸成し、為政者の政策転換を後押しする環境づくりを推進している平和首長会議と方向性を同じくするものであり、今後も核兵器のない世界の実現に向けて着実に取組を推進していく必要があると感じました。

(平和首長会議・2020ビジョン推進課)

被爆体験記



ヒロシマを 生き延びて

本財団被爆体験証言者
切明 千枝子

私が生まれたのは1929年。世界大恐慌が始まった年です。ニューヨークの株式市場の株価が大暴落し、日本も影響を受けて不景気のどん底になりました。失業者が巷にあふれ、自殺者が急増したと聞いています。私は赤ん坊ですから、その事を知る由もないのですが、その時の空気を吸って生きた人間です。その不況から、いち早く抜け出す方法が戦争だったのでした。

私が2歳の時に満州事変が起こり、小学校2年生の時に日中戦争、小学校6年生の時に太平洋戦争に突入し、15年間もの長い長い戦争の時代でした。その戦争が広島・長崎への原爆投下を機に日本の敗戦により終わったとき、私は15歳でした。15年戦争をどっぷりと生きたわけです。

広島は原爆で壊滅するまでは軍都でした。広島城の周辺に陸軍の巨大な師団が置かれ、宇品の港は中国大陸や東南アジアの国々を侵略する軍隊の出発港でした。小学生の私も先生に引率されて、出征する兵士を日の丸の小旗を振って「万歳！万歳！」と叫んで見送りました。長じて旧制高等女学校へ進学しましたが、進学とは名ばかりで、毎日、学徒動員で工場に働きに行っていました。1945年(昭和20年)、広島には陸軍の大きな工場が3つありました。兵器補給廠、被服支廠、糧秣支廠です。私はまるで派遣社員のように、そのすべての工場に働きに行きました。アメリカが原爆を作っている時に、私は兵器補給廠で古い鉄砲の錆落とし、被服支廠で軍服の古着の洗濯補綴をしていたのです。

そして8月6日、その日は皆実町の煙草工場に動員され、軍用の煙草の粉まみれで働いていました。工場内勤務だったので、1人だけ機械の下敷きになり亡くなった方がいましたが、私やクラスメイトは爆風で飛び散ったガラスの破片が頭や首筋に刺さって軽い

ケガをしたものの命は助かりました。しかし下級生は大変でした。広島市役所の裏あたり（爆心地からおよそ1.2km・現在の国泰寺町）へ建物疎開の後片付けに動員されて



市民が描いた原爆の絵「全身火傷で逃げる学徒たち」(作者 村上美佐子)

いたのです。全身火傷で衣服は焼けて裸同然、水膨れになった皮膚が剥がれて指先からぶらさがったり、足元に引き摺るといふ様子で、凄惨としか言いようのない有様です。何人かは学校まで戻ってきましたが、医者もいなければ薬もありません。家庭科の実習室に残っていた古い天ぷら油を塗るのが精いっぱいの手当てでした。煙草工場から学校まで逃げ帰った私達が手当てをしたのですが、彼女らは、もがき苦しみながら次々に死んでゆきます。その下級生を私はこの手で火葬にしたのです。校庭の片隅で、桜の花びらのような淡いピンクの小さな骨を、泣きながら拾いました。こんなことが二度とありませんように。

今年 91 歳の婆さんになる私は、幼くして死んでいった彼女達のことを忘れることはできません。その冥福を祈り、恒久平和を守るには、今なにをすべきかを、ひたすら考える日々です。

プロフィール

〔きりあけ ちえこ〕

1929 年生まれ。高校 1 年生の 15 歳の時に爆心地から 1.9km 離れたところで被爆。2019 年より被爆体験証言者として活動を始める。

「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催

本財団では、広島市と共催で、市民が「平和の原点」としての「ヒロシマ」を見つめ直し、原爆や平和について考え、どのように行動していけばよいかを探求する機会を提供するため、「ヒロシマ・ピースフォーラム」を開催しています。今年度も広島市立大学の講座「広島からの平和学」と連携して、10 月から 2 月までの間に全 6 回開催し、同大学の学生を含む 10 代から 70 代までの約 80 人が受講しました。

今年度は「被爆の実相を知り、これからのヒロシマを考える」をテーマとして、平和記念資料館の見学や被爆体験証言の聴講などを通じて被爆の実相について学び、「グローバルヒバクシャ」、「ルワンダとヒロシマ」、「ツーリストが体験したいヒロシマ」など国際的

な視点で世界恒久平和について考える講座を実施しました。

「ルワンダとヒロシマ」については、福島県在住の「ルワンダの教育を考える会」理事長の永遠瑠まりルイズさんのお話に加え、ルワンダに留学経験のある広島市立大学の学生や卒業生によるパネルトークも実施しました。また、被爆者体験証言をたどるまち歩きを行っている若者の平和活動グループ「つむぎ屋」や、平和記念資料館が実施する「中・高校生ピースクラブ」の卒業生で被爆ピアノコンサートなどを開催している若者に、自分たちの取組の紹介と平和への思いなどを発表していただきました。最終回では、グループ討議で第 1 回から第 5 回までの講義の内容を振り返るとともに、平和な世界の実現に向けて自分たちにできることなどについて意見交換しました。

このピースフォーラムを通して参加者の平和意識の高揚を図ることができました。

(平和連帯推進課)



ルワンダでの留学経験を語るパネリスト(第 4 回)

「ヒロシマ平和行政実務者研修」を開催

平和首長会議では、加盟都市の青少年に対し、広島において被爆者の体験や平和への思いなどを学び、交流を深めるために実施している事業への参加を支援しています。その一環として 1 月 30 日(木)、31 日(金)の 2 日間で「ヒロシマ平和行政実務者研修」を開催し、平和首長会議国内加盟都市の職員 14 人(北海道旭川市・北広島市、東京都港区・府中市・国立市、神奈川県茅ヶ崎市、長野県松本市、岐阜県高山市・御嵩町、京都府向日市、兵庫県明石市・宝塚市、福岡県上毛町、鹿児島県鹿児島市)を招へいしました。

この研修は、国内加盟都市の若手職員に被爆の実相や被爆者の平和への思い、広島の平和推進事業などを学んでもらうことにより、それぞれの地域における核兵器廃絶と世界恒久平和に向けた取組を牽引する人材の育成を図るとともに、国内加盟自治体間のネットワークを築いていただくことを目的としています。

研修では、平和記念資料館の見学や、被爆体験講話、原爆被害の概要を学ぶ平和学習講座、広島市立大学広島平和研究所の永井均副所長の講義の聴講などを通じて、被爆の実相を学んでいただきました。また、市長訪問では、参加者が各自治体での平和の取組を報告するとともに、松井市長から「平和」の定義やヒロシ

マの役割など、平和に対する考え方を語っていただきました。その他、広島で平和のために活動している若者の取組や、広島市や平和記念資料館啓発課が行っている平和推進事業の説明を受け、各自治体が抱えている課題や今後取り組んでいきたいことなどについて意見交換した後、若者を対象にした平和事業などの3つのテーマに分かれて平和事業の素案を作成しました。



市長訪問

参加者からは「被爆の実相を深く理解でき、あらためて平和の取組を推進していく意識が高まった。広島で学んだ平和の取組を、来年度の事業に取り入れていきたい」、「広島だけでなく他の自治体の取組も学ぶことが出来、自分の自治体で取り組んでいけることのアイディアが広がった」といった感想が寄せられました。

今回の研修で学んだことを各自治体での平和の取組に生かしてもらうよう、研修に参加した自治体へのフォローアップを図り、平和首長会議国内加盟都市間での連携をさらに強化して国内における平和の取組の活発化につなげていきたいと考えています。

(平和連帯推進課)

聞かれました。

ガイドを受けた外国人からは、「学生たちが歴史について説明してくれたら勉強になった」、「外国人が多いので、このような活動は大変有意義だ」との感想が聞かれました。



ガイド活動を行うユースピースボランティア

ユースピースボランティアは、これまでの活動を通じ被爆者の思いをしっかりと受け継いだ上で、自分の考えを英語で相手に伝える楽しさと難しさの両方を実感し、さらに努力していきたいとの決意を新たにしています。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

「子どもたちによる“平和なまち” 絵画コンテスト」を実施

平和首長会議では、加盟都市における平和教育の更なる充実を図ることを目的として、全加盟都市の6歳以上15歳以下の子どもたちを対象とした“平和なまち”絵画コンテストを実施しました。

2回目となる2019年のコンテストでは、世界21か国70都市で2,829作品の応募があり、そのうち各加盟都市の審査を経た341作品が平和首長会議事務局に寄せられました。



平和首長会議会長賞
イラン・シーラーズ市 キアナ・ボルドバルさん
(10歳)

6歳から10歳までと11歳から15歳までの2部門で、それぞれ最優秀賞

1点、優秀賞2点、入選3点を選定し、更に各部門の最優秀賞作品から1点を平和首長会議会長賞に選びました。平和首長会議では会長賞受賞作品のデザインを転写したクリアファイルを作成し、平和教育の重要性についての認識を広げるため、様々な取組で活用することとしています。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

ユースピースボランティアが活動開始

本財団は今年度から、青少年が平和記念公園を訪れる外国人に対して被爆の実相を英語で伝えるボランティアガイド制度を創設し、その活動を支援するユースピースボランティア事業を開始しました。

公募により決定したユースピースボランティア31人(高校生25人、大学生6人)は、昨年6月から7月にかけて3回の事前研修会を受講しました。参加した青少年は、被爆体験証言者や英語でガイドをしているピースボランティアによる講義の聴講、慰霊碑のガイド原稿の作成等を通して被爆の実相についての理解を深めるとともに、平和記念公園を英語でガイドするために必要な知識やスキルを学びました。

2月までに41か国・地域の232人を案内

参加した青少年は8月から月1回のガイド活動を行っており、今年2月までの6回の活動を通して、米国、インド、アルゼンチンなど41か国・地域の232人の外国人を案内しました。

ガイド活動を行ったユースピースボランティアからは、「話を熱心に聞いてくれてとてもうれしい気持ちになった」、「外国人観光客と意見交換ができて参考になった」、「原稿を棒読みしてしまったところがあったので、もっと練習が必要だと感じた」といった感想が

平和首長会議事務局が海外加盟都市からインターンを受け入れ

平和首長会議では、海外の加盟都市の若手職員等をインターンとして広島に招へいし、事務局の業務に従

事してもらおう取組を行っています。今年度は、5か国・5都市から各1人をインターンとして受け入れました。

インターンには母国の加盟都市に関する情報更新や未加盟都市の調査などの業務を体験してもらいました。また、インターンから、自都市の平和の取組を本財団の職員や市民等に紹介してもらい、相互理解と連携強化の促進を図りました。

また、平和記念資料館、平和記念公園、原爆死没者追悼平和祈念館、放射線影響研究所の見学に加え、被爆体験講話の聴講、広島市の青少年との意見交換なども実施し、被爆の実相への理解を深め、平和への思いを共有してもらいました。

各インターンは帰国後、広島で学んだことを基に様々な平和活動を行っています。事務局では、このインターンシッププログラムを通じて、核兵器のない平和な世界の実現を願うヒロシマの心が世界に広まることを期待しています。

国	都市名	人数	期間
カザフスタン	セメイ	1	R1. 6.19～ 7. 2
スペイン	グラナダ	1	R1. 7. 9～ 7.26
イラン	テヘラン	1	R1. 9. 4～ 9.27
ブラジル	サントス	1	R1.11.18～11.29
英国	マンチェスター	1	R2. 2. 3～ 2.14

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

「広島・長崎講座」開設大学へ支援

広島市と長崎市は、被爆の実相や被爆者のメッセージを若い世代に伝えるため、それらを学術的に整理・体系化し、学問として普遍性を持たせた「広島・長崎講座」の開設を国内外の大学に働き掛けるとともに、その普及に取り組んでいます。

韓国の大学が広島で平和学習

今年1月21日(火)、慶北国立大学校人文大学の学生18人と教員1人が、同講座認定後2回目となる広島市での平和学習を行った際、本財団はプログラムの



ピースボランティアによる平和記念公園の案内

実施を支援しました。一行は、平和記念公園や平和記念資料館の見学、李鐘根さんによる被爆体験講話の聴講、被爆体験記朗読会の聴講などを通して、被爆の実相について学びました。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

オバマ財団主催「アジア太平洋地域リーダーズプログラム」に出席

昨年12月10日から14日までの5日間、マレーシア・クアラルンプール市で開催された「2019 アジア太平洋地域リーダーズプログラム」に、本財団平和首長会議・2020 ビジョン推進課の職員が参加しました。

このプログラムは、インドネシアやオーストラリアなど、33か国・地域の約200人を対象にオバマ財団が実施したものです。若いリーダーたちのスキルを高めることにより、彼らの活動に活力を与え、結び付けるとともに、新しい世代のロールモデルを育成することを目的として開催されました。

オバマ前大統領も講義

プログラムの期間中、バラク・オバマ前米国大統領や同夫人、アジア最大級のLCCであるエアアジア・グループCEOのトニー・フェルナンデス氏等、様々な分野で活躍する人物による講義や、リーダーシップを育む方法について学ぶワークショップ、地域コミュニティでのボランティア活動の機会などが提供されました。



参加者に向けてメッセージを発信するオバマ前米国大統領

本財団の職員は、アジア太平洋地域の若いリーダーと意見交換を行うことにより、互いの価値観を共有することができました。また、被爆の実相や平和首長会議の取組について紹介し、今後の活動に対する理解と協力を求めました。

(平和首長会議・2020 ビジョン推進課)

“平和について思う”

国家が崩壊するとき：チャウシェスク政権崩壊を事例として

—東西冷戦終結30年に寄せて—



広島市立大学広島研究所 准教授
福井 康人

1. はじめに

30年経った今も忘れられないのはルーマニアで国家の崩壊を人生で初めて目にしたことだ。当時私は日本大使館付の語学研修生としてブカレスト大学言語学部つしまに在籍していた。大使館次席の津嶋参事官(当時)

から、国内に不穏な動きがあるので、明日から大使館に来て臨時に館務に従事してほしいと電話があった。当時のルーマニアは、徹底した言論統制下にあり、テレビもラジオも共産主義の宣伝番組か、偉大なる指導者のチャウシェスク同志が工場訪問して労働者を激励する等、チャウシェスク大統領の活動を報じるのみであった。ルーマニア人は宣伝番組の表現から、当時のことを「黄金の時代」と自虐的に呼んでいた。庶民の最大の楽しみは、政治的風刺を言いあって気を紛らわすことであった。

当時の東欧では、職場から配給された休暇チケットを使い、例えばハンガリーのバラトン湖周辺や、黒海周辺で過ごすのが流行であった。そんな中で1989年には特に中東欧の政治的動揺の影響もあり、ハンガリーの国境警備が緩和され、バカンスにきていた東ドイツ人の通過を許可し始めた。東西冷戦の最前線にいたオーストリア国境警察も驚愕したであろうが、次から次へとオーストリアを経由して多くの東ドイツ人が西ドイツに亡命した。こうした動きは直ぐに東ドイツに伝わり、「ピクニック」と呼ばれ、多くの東ドイツ人が後に続き、最終的には東ドイツの崩壊に繋がった。戦勝4カ国（米、英、仏、ソ連）で共同統治されて陸の孤島となっていた西ベルリンの、米英仏占領地区を取り囲む壁は破壊され、チェック・ポイント・チャーリー（東西ベルリン間の国境検問所）等以外でも東西ドイツ間での行き来が自由になった。

そんな政治的状況が東ドイツ、後に分裂したチェコスロバキア、ハンガリーで立て続けに起きたため、当時の外務省東欧課は連日徹夜勤務の職員が疲れ果てて床に寝るほどと聞いた。情勢分析の重点項目の一つが、東欧の改革は強力な政治統制が行われていたルーマニアやブルガリアにも波及するからであった。このため当時東欧への窓口となっていたウィーンに政務担当官が集まって情報交換を行ったりしていた。特にルーマニアでは反体制派に接触すると、逮捕・投獄・拷問に晒されることが予見されており、大使館の現地職員も定期的に派遣元の外交団世話部に大使館内の動きを報告していることも公然の秘密であった。大使館内にも盗聴器が仕掛けられている可能性があるのも、機微な内容の打合わせは、大使館の庭で行うことが多かった。

そんな中で貴重な情報源は東欧からの亡命者が祖国に向けて情報を発信しているヨーロッパ自由放送RFE（Radio Free Europe）であり、BBC、ドイツ・ヴェレ等もルーマニア語放送を行っていた。RFEはミュンヘンにあり、現在もドイツ連邦情報庁が置かれているように、当時から欧州の情報機関の重要な活動拠点であった。こうしたルーマニア語放送局が国内では報道されない東欧の最新状況を報道していたが、1989年12月16日にティミショアラでついに民衆が蜂起して治安部隊と衝突して鎮圧されたと報じられ、市民の間でもその噂は広まり始めた。このため日本大

使館も警戒態勢に入り、私も政務班に増員として臨時配置され、急遽勤務することになった。

2. ティミショアラでの暴動

市民の間でもティミショアラの暴動の話が密かに語られるようになって、肝心の証拠がなかったため、各国も必死で情報収集を行っていた。主要国の大使館が考えたのは、大使館員を現地に派遣して市内の状況を確認することであった。そこで当時の市岡大使は本省とも相談した結果、政務担当官及び防衛駐在官を現地に派遣することにした。勿論、失敗すれば館員がペルソナ・ノン・グラータ（好ましくない人物）として追放され、ルーマニア人運転手が反体制勢力に協力した反逆罪で逮捕される等の報復の恐れもあった。慎重論もあったものの、証拠をつかむにはティミショアラ入りしかないとの結論になり、途中でルーマニア側官憲に妨害されにくいように大使車を使い、目立たぬように3名が静かに大使館を出発した。

米国、フランス、ドイツも同じことを試みたものの、幹線道路から入ろうとしたため、警察の検問で捕捉され、最終的に追い返された。日本は、街灯がないため途中で道に迷いかけたものの、幹線ではなく田舎道からティミショアラにたどり着こうとした。途中で村の駐在所の警察官に見られたものの、気が付いたら街の中心部に到達していたそうである。そこでは、ガラスが割られて粉々に飛散って破壊された商店や、銃弾や流血の跡が見られ、ティミショアラで暴動が発生し、一般市民が弾圧の犠牲になったことは明らかであった。そうしているうちに、市内を巡回していた秘密警察に発見され、現地の臨時指揮所が設置されていた中心部ホテルへ移動し、そこで簡単な尋問を受けてから、ティミショアラは現在外国人立ち入り禁止区域に指定されているにもかかわらず市内に入ったとして、パトカーに先導されてティミショアラからの事実上の強制退去を命じられた。

2名の外交官は来訪の目的を尋ねられただけだったが、ルーマニア人運転手は事情聴取の途中で髪の毛を引っ張られて脅され続け、彼は生きた心地がしなかったと思われる。結果的に日本だけが潜入に成功し、ティミショアラでの惨状のニュースが東京発で世界中に発信された。後日、証拠となる遺体が掘り返され、教会に遺体の入った棺が数多く安置されている映像を私もテレビで見たが、この暴動鎮圧で何名の犠牲者が出たか正確な数字は明らかになっていない。ただ、はっきりしているのは、名前からもハンガリー系住民であることが明らかなラズロー・トケシュ牧師が迫害されて起きた抗議集会が引き金となり暴動に発展し、これに対して治安当局が発砲も辞さずに制止しようとしたため、犠牲者が多数出てしまったことである。東欧でミノ現象のように共産党政権が倒れて政権交代が次々と起きたことが背景にあり、ティミシユ県の治安機関

は中央政府と連絡を取りつつ、体制維持のために強硬策に出たものと思われる。

3. 共産党本部前の官製集会

ティミショアラ動乱の時にチャウシェスク大統領はどうしていただろうか。彼はイランに外遊中であり、当然ティミショアラでの騒動について報告を受けていたはずである。数日後にチャウシェスク大統領が帰国したとの報道があったものの、ティミショアラで起きたことについてルーマニア国営テレビは一切報じなかった。そのうちに、政府が集会を予定しておりチャウシェスクがティミショアラの暴動について非難するとの情報が入ってきた。それは12月21日午後であり、暴動発生から5日後であった。当時の大使館からそれほど遠くない場所なので、我々も昼前に市内の様子を伺いながら徒歩で現地に行った。

その場所は旧王宮が国立美術館として残されており、歴史的建造物であるアテネ音楽堂や、由緒あるアテネ・パレス・ホテルやブカレスト大学図書館、更には共産党本部があった。本部周辺は立入禁止で、元々は王宮を守る内務省の建物であったという。後述する銃撃戦が始まってから判明したが、周囲のアパートには体制側の秘密警察関係者等政権に忠実な住民が住んで、共産党本部を守っていた。そのような歴史的背景のある建物であり、地下のトンネルで2つの建物が繋がっていたなど、後になって驚くことばかりであった。また周辺では、党幹部や政府要人の自動車に割り当てられた1B3桁のナンバープレートの車が無謀な運転をするので要注意と言われていた。市内中心部でも昼間にいきなり通行止めになることもあり、それはプリマベリ地区にある公邸と共産党本部とのチャウシェスクの往来時であった。

そのような場所の前の広場が集会会場に選ばれ、動員された市民が続々と詰め掛けてきた。ティミショアラと同じようなことが起きては困ると当時の政府も思ったのか、警備も厳重であった。我々は少し離れたアテネ・パレス・ホテルの周りから観察していたが、日本人でルーマニア語を話す人も限られていることから、私服の秘密警察も日本大使館関係者が集会の様子を偵察に来ていることは把握していたと思われる。もともと、これまでの集会とは異なり、共産党本部前には動員者を輸送した後のバスが横付けされ、盾のように配置されていた。そのうちにチャウシェスクが正面のバルコニーに現れた。

ティミショアラの非難声明が既に出されていたが、チャウシェスクが話し始めた直後に前方で爆発音が鳴り、驚いた動員者が警備の警官や私服の秘密警察の人垣を乗り越えて、市内中心部に流れ始めたため、我々もあわてて大使館に戻った。後で放映されたビデオを見ると、チャウシェスクも予期しない状況が発生したため、啞然とする表情が印象的であった。そして、取

り巻きの幹部があわてる一方で、一般市民が「チャウシェスク打倒」と叫び始め、市内中心部に流れて、クラクションを鳴らす自動車もあり、まるで解放区のような感じになった。ところがそれが終わりではなく、市街戦の始まりであった。

その日は偶然であるが近隣の大使館からブカレストに出張者がいたこともあり、大学広場前のインターコンチネンタル・ホテルに部屋を予約していた。上層階のその部屋からはブカレスト大学等がきれいに見えたが、集会後に機関銃を装備した装甲車がどこからともなく現れて、群集と化した市民と対峙して追い込み始めた。慌ててその路上の様子を大使館にホテルの部屋から電話で伝えて、伝令ゲームのように大使館の別の人が東京に伝えることが出来た。このため、緊張したブカレストの様子がなぜか東京発で即時に発信されるという不思議な状況が続いた。

というのもブカレスト市内で夕方から治安部隊が出動して緊迫感が漂い始め、空港も閉鎖され、チャウシェスク政権末期の厳しい報道統制もあり、日本の報道関係者は「赤旗」特派員だけであった。現在とほぼ同じで在ウィーン東欧記者会所属の特派員等が何かあると大使館に電話取材してくるだけで、他国も同様であったため、報道するにも出来ない事情があった。そのうち夕闇の中で銃声が響き、ついに発砲が始まった。当初は上を向けての威嚇射撃であったので、我々はホテルの窓の外を実弾が通過する直ぐ傍にいたことになり、命中すると確実に死亡する恐怖感を味わいながら、みんなあわてて室内に避難したのを覚えている。

銃声は続いており、そのうち戦車まで出てきて、そちらは空砲であったが、市民を恐怖に陥れるのには十分であった。昼間に居た広場は戦場ようになり、我々も身の危険を感じながら現場の状況把握を行っていた。大学図書館には火が放たれ、旧王宮の国立美術館や近所のアパートからも銃撃が行われるので、正直怖かったし、中心部から離れた大使館にも流れ弾が飛んできてガラスが割れた。ミレア国防大臣は責任を取らされて解任され、自殺か殺害されたか定かではないが、いずれにせよ後任にはティミショアラ掃討作戦を指揮したスタンクレスク将軍が任命された。しかしながら、彼は空気を読んで命令を拒否して、国軍が市民側に寝返った。22日昼ごろチャウシェスク夫妻はヘリで逃亡を図ったものの、ティトー空軍基地に強制着陸させられ、翌23日には陸路での逃亡の末逮捕された。

4. 結びにかえて

22日に権力を掌握したイリエスク氏らが救国戦線臨時政府の樹立宣言する一方で、26日にはチャウシェスク夫妻を形式的な軍事裁判に付して死刑を宣告し、直ちに銃殺された様子がテレビで報道された。栄華を誇ったチャウシェスク政権は衝撃的な結末を迎えたが、秘密警察を中心としたチャウシェスクに忠誠を

誓った残党組が共産党本部の周りの建物から銃撃して最後まで抵抗した。実は銃撃戦があったのは、それ以外の地区では国防省とテレビ局周辺と限定され、正に権力掌握のための市街戦であった。幸い当時の日本大使館はこうした場所から離れていて安全なので、80名余りの在留邦人が大使館に避難してきたが、避難に見せかけて大使館に入り取材活動を行い、こっそりと電話で連絡する某公共放送局記者には、在留邦人の生命が懸かっているの、正直閉口した。

同時並行的に、外務本省から在米大使館に訓令を發出し、米が陸路で米市民を避難させる際に在留邦人も同行することで合意が得られて、翌朝には出発の準備が始まった。大使館を出発して米大使館脇に車列を組んで待機していた時に、近隣の秘密警察の建物から銃撃が始まり、米大使館を警備する海兵隊が応戦した。泣き出す子供も居て、一緒に居た我々も生きた心地がしなかった。そのうち銃撃戦も止み、一行も隣国ブルガリアに向けて出発し、数週間後に安全になってから帰国した。そのうち残党組も投降して市内の銃撃戦も収束したが、激戦のあった地区では焼け跡となった建物が長く残っていた。

その後も、首相府（以前は外務省）の前で毎日のようにデモが続き、また、大学広場でもデモ隊と治安部隊との衝突による若者の犠牲者を追悼してデモが続いていた。1990年6月には政権を掌握したイリエスク大統領がブカレストに呼んだとされる炭鉱夫が狼藉を働いてデモに参加する一般市民を襲い、デモは崩壊したもの、政権が変わっても民主主義の確立には時間を要することが伺われた。事実、ルーマニアがNATOに加盟したのが、私が2回目に政務班長として勤務した2004年であり、EU加盟を果たしたのが離任後の2007年である。その後国外に出稼ぎに行くルーマニア人も増え、2018年は在外ルーマニア人のデモが起きた。ゆっくりと民主化の道を歩むのがルーマニアの現状であり、一連の出来事は私が平和、市民、国家と言った基礎的な概念を考える上で非常に役に立っている。

平和については、サロモン編『国際法事典』が「戦争のない状況」と定義し、平和研究所の同僚が出版した本にも類似の記載が見られる。ではこの「ルーマニア革命」は該当するであろうか。この定義は国家間の開戦宣言をして戦争を始める場合は該当するものの、共産党内の権力闘争と見る人は「宮廷革命」と称するように、こうした非国際的武力紛争は該当せず、他方、武力紛争ともいえる戦闘が起きていて犠牲者も生じた。市民といっても、デモを統制していた秘密警察は制服を着ておらず、我々と変わらないので定義も難しい。国家についても、最終的には政変により体制は変わったものの、あの状況下で国家がどのような変容を遂げたか説得力のある説明は難しい。あの時の出来事は事実の歴史的解明の必要性和、単純化できない戦

争と平和の位相や市民と国家の関係の説明の難しさを我々に示している。

（令和2年2月寄稿）

プロフィール

〔ふくい やすひと〕

1964年兵庫県生まれ。パリ第1大学で博士号(法学)を取得。専門は国際法(軍縮国際法、国際人権法等)。2015年3月に外務省を退職し、広島市立大学^{しんざんしや}広島平和研究所に赴任。主な著書は『軍縮国際法の強化』(信山社より2015年2月刊行)、『通常兵器軍縮論』(東信堂より2020年3月刊行)

資料調査研究会研究発表会 会員が研究成果を発表

令和元年12月7日(土)、広島平和記念資料館資料調査研究会の研究発表会が開催され、5人の研究者が発表しました。来場者は約50人でした。

○^{いしまるのりおき}石丸紀興会員(広島諸事・地域再生研究所代表・元広島大学教授)

「平和祭・平和記念式典の場所移動と定着過程に関する研究」と題し、平和記念式典会場の変遷について報告しました。

○^{たかづまようせい}高妻洋成会員(奈良文化財研究所埋蔵文化財センター長)

「リニューアルオープンした本館の展示環境」と題し、リニューアル後の本館の展示環境調査結果などを報告しました。

○^{しずまきよし}静岡清会員(広島大学客員教授)

「広島原爆線量評価に果たした被爆建造物および被爆資料の役割(その3)―被爆鉄材中の⁶⁰Co―」と題し、一昨年及び昨年からの継続となる報告をしました。

○^{たけさきよしひこ}竹崎嘉彦会員(中国書店)

「DS02(第5章)における地図と爆心地座標の取扱」と題し、「2002年線量推定方式」(DS02)第5章における爆心地座標の取扱について地図学的な検証を報告しました。

○^{ねもとまさや}根本雅也特別会員(明治学院大学国際平和研究所助手)

「日本とアメリカの間で―在米被爆者の運動と生活史」と題し、在米被爆者のアメリカと日本での運動の概略を報告しました。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
TEL (082) 241-4004



高妻会員の発表の様子

企画展「海外収集資料から見る広島原爆被害と復興」を開催しています

場 所 平和記念資料館 東館1階企画展示室
期 間 令和元年12月27日(金)
 ~令和2年7月下旬
内 容 海外で収集した写真63点、海外から寄贈を受けた写真4点、コラム9点、展示ケース内被爆資料等21点、プロジェクターでの写真・映像展示1点、テレビでの証言映像等展示1点
入場無料

広島原爆被害を撮影した写真資料は、被害を知るうえで重要な意味を持っています。これまでも多数の写真が知られていますが、原爆投下後に多くの外国人が広島を訪れたため、日本では知られていない写真資料が海外にも多数存在しています。



中島方面から東を望む 1945年(昭和20年)10月頃
 米軍撮影/ジョン・ピーターソン夫人寄贈/米海軍歴史遺産部所蔵
 2016年(平成28年)収集

平和記念資料館では、海外からデータを取り寄せるほか、職員を海外に派遣し、各機関や個人が所蔵する写真資料等を収集してきました。

この企画展では、近年海外から収集した写真資料や証言により、広島原爆被害と被爆後の復興を紹介しています。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
 TEL (082) 241-4001

「収蔵資料の紹介」コーナーで「レプリカー遺品の語り部」を開催しています

場 所 平和記念資料館 東館1階企画展示室
期 間 令和2年1月24日(金)
 ~令和2年5月(予定)
展示資料 期間中、一部資料の入れ替えを行います。
 前期: 実物資料5点/複製資料5点
 後期: 実物資料6点/複製資料6点

「収蔵資料の紹介」コーナーでは、平和記念資料館で収蔵している約2万点の資料の中から、テーマに沿って数点ずつを展示しています。

1945年(昭和20年)8月6日、一発の原子爆弾により広島原爆のまちは、一瞬にして廃墟と化しました。大量の放射線を浴び、体を焼かれ多くの人々が苦しみながら亡くなりました。



被爆した仏像
 寄贈: 佐藤普門

今回は、先端的な技術と職人の技で製作された複製品とともに紹介します。

【お問い合わせ】

平和記念資料館 学芸課
 TEL (082) 241-4004

資料館本館「市民が描いた原爆の絵」展示入替

平和記念資料館本館の展示「3 魂の叫び」の一角で「市民が描いた原爆の絵」の原画を展示している「絵筆に込めて」のコーナーでは、6点の絵を今年2月下旬に入れ替えました。展示による絵の劣化を防ぎ、長期的に保存していくため、今後も定期的に入れ替える予定です。

今回は、いずれの作者も過去に資料館が制作した被爆者証言ビデオに出演し、自分が描いた絵を見ながら、自らの被爆体験を語っています。

これらの証言ビデオは東館3階の被爆者証言ビデオコーナーと東館地下1階の情報資料室で閲覧できますので、あわせてご覧ください。3階のビデオコーナーでは字幕付きで視聴可能です(日本語版と英語版あり)。



本館「絵筆に込めて」

(平和記念資料館 学芸課)

「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」を実施 —“ヒロシマの心”を世界へ—

広島市では、長崎市と共同で、ニューヨーク、ジュネーブ、ウィーンの国連施設に、被爆資料や写真パネルなどで構成する常設の原爆展を開設しており、日々、各国政府の指導者をはじめ、世界中から多くの見学者が訪れています。

原爆展を通して、より効果的に被爆の実相を伝えるためには、案内役のガイドやガイドツアー担当職員に被爆の実相を共有していただくことが不可欠です。このため、平和記念資料館では、国連3施設の見学ツアーガイドを広島に招聘し、被爆の実相を理解するための「国連見学ツアーガイドのヒロシマ研修」事業を平成29年度に開始しました。3回目となる今回は、ガイド6人を対象に、昨年11月30日（日）から12月4日（水）までの5日間、実施しました。

研修の内容は、講義の受講のほか、平和記念資料館の見学、慰霊碑や被爆遺構めぐり、被爆体験講話の聴講、ボランティアとの交流会、市内見学などです。



滝川館長による平和記念資料館案内

今回、初の試みとして、被爆体験証言者による講話の英語通訳を、証言者の娘である被爆体験伝承者が行い、母娘で被爆の実相と平和への思いを届けました。また、資料館の展示見学後に学芸員が展示コンセプトの決定や展示資料の選定の過程について受講者に話しました。ここでは、展示物を案内するガイドとしての視点に立った質問が多く寄せられました。

受講者からは、「証言を聴き、人生観が変わるほどの強い衝撃を受けた」、「広島でしかできない貴重な経験を得て、今後の自身の業務に大いに励みになった。ここで学んだことをツアーに反映させることで、核兵器廃絶の必要性をよりリアリティを伴って訴えることができる」との感想が寄せられました。

今後もこの事業を中心に、国連各施設における原爆被害に関する展示の充実や、各施設で行われるツアーでの被爆・核兵器廃絶に関する解説内容の拡充を図り、国際社会での“ヒロシマの心”の発信力の強化に努めていきます。将来的に国連施設に被爆体験証言者と資料館職員を派遣し、証言と被爆の実相に関する講義を行う「出張研修」を実施することも検討しています。

(平和記念資料館 啓発課)

ウェブ会議システムによる 海外への被爆体験証言 ～被爆の実相を世界に～

平和記念資料館では、国外にも広く被爆の実相を伝え、核兵器廃絶に向けての国際世論を醸成するため、インターネット回線を利用して被爆体験証言を行う「ウェブ会議システムによる海外への被爆体験証言」を実施しています。

今年度は核兵器保有国のアメリカとイギリスを含む4か国に対して、5回実施しました（2月12日現在）。聴講者からは、「言葉にならないほどの衝撃を受けた」、「核兵器廃絶へ向け、他者を思い



イギリスの小学生に講話する被爆体験証言者の小倉桂子さん

やる心を大切にしていきたい」といった感想や思いが寄せられました。小学生から大人まで、幅広い世代がこの事業を通じて被爆者の思いに共感しています。

当館は今後も様々な媒体を活用して国内外へ被爆の実相を伝えていきます。

(平和記念資料館 啓発課)

英語で伝えよう ヒロシマセミナーの実施

平和記念資料館では、原爆被害の実相を正しく英語で伝えるための知識と表現を学ぶ「英語で伝えようヒロシマセミナー」を平成18年度（2006年度）から実施しています。

今年度は7月の実施に続き、2月2日（日）にベーシック編、8日（土）にアドバンス編をそれぞれ実施し、10代から80代まで合計371人が参加しました。



ベーシック編の様子

ベーシック編の前半では、翻訳家兼ライターのアナリス・ガイズバート氏が、原爆被害の概要について日本語を交えながら英語で説明しました。後半は一般社団法人ひろしま通訳・ガイド協会の上田美紀氏と山本愛子氏が、平和記念公園にある慰霊碑などの解説を行いました。

アドバンス編では、グリーン・レガシー・ヒロシマ共同創設者兼コーディネーターのナスリーン・アジミ氏が講師を務め、ヒロシマの復興について英語で説明しました。その後、広島市立大学名誉教授のキャロル・リナート氏が、グループディスカッションを指導しました。

参加者からは、「ガイドの心得を学べた」、「もっと広島のことを知らなければと思った」、「いろいろな方とヒロシマについて話し合い、貴重な意見を聞くことができた」といった声が寄せられました。

(平和記念資料館 啓発課)

令和2年度被爆体験伝承者等派遣申込受付開始 —新たに被爆体験証言者の派遣も行います—

国立広島原爆死没者追悼平和祈念館では、被爆者の体験や平和への思いを次世代に語り継ぐため、広島市内を除く全国の小中学校、高等学校、自治体等に、被爆体験伝承者と被爆体験記朗読ボランティアを無料で派遣する「被爆体験伝承者等派遣事業」を平成30年度から実施しています。

今年度も全国から大きな反響をいただき、派遣件数は昨年度の306件を上回る447件（被爆体験伝承者396件、被爆体験記朗読ボランティア51件）を実施し、約8万人の児童生徒等に被爆体験を伝えることができました。

3年目となる令和2年度の申込受付を2月3日から開始しました。新たに被爆体験証言者の派遣も予定しています。被爆者本人が直接、被爆体験をお話し、平和について深く考える機会となります。

派遣先は原則、受付順で決定し、令和2年4月から順次派遣します。なお、申込件数が上限に達した場合は受付を締め切ります。

実施内容についての詳細は、国立広島原爆死没者追悼平和祈念館ホームページ（URL：<https://www.hiro-tsuitokinenkan.go.jp/>）に掲載していますので、ご確認ください。多くの方の申し込みをお待ちしています。

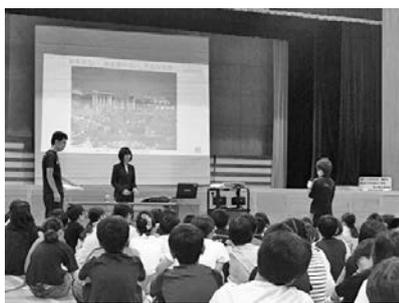
【令和元年度に寄せられた感想】

被爆体験伝承講話への感想／北海道北広島市立大曲東小学校・西の里小学校より

その当時、どんなことが起こったのかを、一人の少年の体験に基づき、丁寧にリアルにお話しただいて、戦争や原爆の恐ろしさ、命の大切さを勉強することができる大変有意義なものとなりました。小学校5、6年生の児童に対して、とても寄り添ってわかりやすくお話いただきました。最後の質疑応答もとても丁寧でした。

被爆体験記朗読会への感想／福井県美浜町立美浜中学校より

一言ひとことに込められた被爆者の思いの深さを感じました。「悲しい、苦しい、辛い」といった負の感情を表す言葉がなく、淡々とした事実の積み重ねから、



被爆後の写真や市民が描いた原爆の絵を示しながらお話しします

戦争が人々にどんな現実を突きつけたのか、その重さが胸に迫りました。朗読を聞いた生徒たちは、体全体で朗読に向かっていました。心を揺さぶられたからこそその姿勢であると感じました。



2人のボランティアが被爆体験記を朗読します

（原爆死没者追悼平和祈念館）

「姉妹・友好都市」の日イベント 市民が海外文化を堪能

モンリオールの日

昨年7月21日（日）、福屋広島駅前店にて記念イベントを開催しました。主催—平成31年度モンリオールの日実行委員会

はじめに、メープルウォーターの試飲や広島市皆賀園オリジナルのメープルラスクの試食を行い、記念セレモニーでは主催者やケベック州政府在日事務所代表のあいさつ、モンリオール市長からのメッセージの紹介がありました。

続いて、ヒロシマ・メッセンジャーの山本主悦さんと飯村徳穂さんによるクイズを織り交ぜたモンリオール市の生活・文化の紹介や、ジャズ歌手hisaka



hisakaさんによるジャズ演奏

さんの記念パフォーマンスが行われました。カナダで2枚のアルバムをリリースし、日本でもハイレゾジャズ部門のシングル人気ランキングで長きに渡り1位を記録したhisakaさんの歌声に、大きな拍手が鳴りやみませんでした。

この他、メープルシロップなどの特産品が当たるお楽しみ抽選会、モンリオールとカナダの紹介展示や特産品の展示・販売などを行いました。

約250人の来場者は、食や芸術文化を楽しみながらモンリオールやカナダへの理解を深めていました。

重慶の日

昨年10月26日（土）、広島市留学生会館にて記念イベントを開催しました。主催—平成31年度重慶の日実行委員会

会場入り口では、広島市植物公園で大切に育てられている重慶市から贈られた菊の展示が来場者を迎えました。会場内では、重慶の街や生活の様子を写した写真、中国各地域の食文化の違い、両市の動物交流の情報、和紙ちぎり絵交流の様子などの展示があり、さらに、「中国語で話してみよう」や、中国切り絵、和紙ちぎり絵、ポップアップ折り鶴、中国茶の体験コーナーを設け、常に席が埋まるほど多くの方が様々な体験を楽しみました。試食は、中国でよく食べられる杏仁酥（中華クッキー）^{あんじんすう}と棗とくるみのサンド^{なつめ}、麻花^{まあふあ}、菊花茶を用意し、来場者は珍しい食文化に大変興味を持っていました。

開会セレモニーでは、塚田博^{つかだひろし} 実行委員長、小池信之^{こいけのぶ} 広島市副市長が挨拶し、重慶市長から届いたメッセージを披露しました。

その後、ヒロシマ・メッセンジャーの羅明涵^{らめいかん}さんと劉丹^{りゅうたん}さんが、重慶市の街の様子や食文化等を写真を使って紹介しました。クイズを織り交ぜた楽しく軽やかな話に、会場は大いに盛り上がりしました。

記念ステージでは、日本中国友好協会広島支部の皆さんによる太極拳^{たいきょくけん}が披露され、来場者も一緒に基本の動作を学び、優雅でゆったりとした動きを体験しました。その後、中

国伝統川劇俳優の江玉^{せんげき}さんにより「変面^{へんめん}」が披露され、技に引き込まれた来場者から、もっと見たい、また来年も変面を見たい、という声をいただきました。



江玉さんによる中国伝統芸能「変面」の演舞

イベントの最後には、重慶市等から頂いた中国関連グッズの抽選会を行いました。

約240人の来場者は、様々な体験を通して、楽しみながら重慶市や中国への理解を深めていました。

広島市・ホノルル市姉妹都市提携 60 周年記念 ホノルルの日

昨年11月5日（火）、JMS アステールプラザ中ホールにて記念イベントを開催しました。主催一平成31年度ホノルルの日実行委員会

広島市・ホノルル市姉妹都市提携60周年を記念し、ホノルル市からロイ・アメミヤ行政長官、駐大阪・神戸アメリカ総領事館からシリア・トンプソン領事部長ご臨席のもとで盛大にイベントを開催しました。

記念セレモニーでは山本実^{やまもと}実行委員長、松井^{まつい}広島市長が挨拶し、その後、アメミヤ行政長官、トンプソン領事部長が挨拶されました。

続いて、ヒロシマ・メッセンジャーの森脇透^{もりわきとる}さんと木村留美^{きむらるみ}さんが、ハワイ州ホノルル市の概要、姉妹都

市提携60周年を記念したホノルル市への親善訪問やハワイ語の紹介を行いました。広島市との交流の歴史が長いホノルル市について詳しく知ることができ、来場者からも好評でした。



アウ・ホイさんを含む出演者約60人によるコラボステージ

姉妹都市提携60周年記念公演では、まず始めに広島市のハワイアンバンドとフラのグループがパフォーマンスを披露しました。その後、ホノルル市を拠点に活動するスチールギター奏者のジェフ・アウ・ホイさんが演奏すると、たちまち会場が南国のハワイの雰囲気につつまれ、来場者は魅了されました。最後に、アウ・ホイさんを含めた総勢約60人の出演者がコラボステージを行い、フィナーレにふさわしい盛り上がりを見せ、イベントを締めくくりました。

また、ホールロビーには、姉妹都市提携60年の歩みやハワイへの移民を紹介する展示パネルを設け、これまでの交流の歴史を振り返りました。

ハワイアングッズの展示・販売コーナーでは、色鮮やかなアロハシャツ等に多くの方が見とれていました。

約400人の来場者は、イベントを通じ、楽しみながらホノルル市やハワイ州への理解を深めていました。

（国際交流・協力課）

「世界を知ろう!」 「Have a Natter!」の開催

毎月第4水曜日（原則）に国際交流ラウンジで「世界を知ろう!」と「Have a Natter!」を開催しています。

【世界を知ろう!】 市内在住の外国人住民や、当センターが事務局を務める平和首長会議の加盟都市からのインターン（研修生）に、出身国、都市の様々な文化や、平和の取組などを紹介していただいています。

【Have a Natter!】 当課で勤務しているイギリス出身のマーク・マクフィリップス国際交流員と参加者がグループになり、自由な会話を通して、交流を楽しみます。使用言語は、奇数月は英語、偶数月は日本語です。また、希望者には、個別相談を行っています。

【実施日時】 原則毎月第4水曜日／「世界を知ろう!」13:30~14:15、「Have a Natter!」14:45~15:45
※要予約 各先着10人

【お問合せ先】

国際交流・協力課

TEL (082) 242 - 8879

JICAサロン バヌアツ共和国ってどんな国？ ～青年海外協力隊が語る派遣国の魅力～

2月9日（日）、広島国際会議場国際交流ラウンジを会場に、(独)国際協力機構中国センター(JICA 中国)との共催で、平成31年度第3回 JICA サロン「バヌアツ共和国ってどんな国？～青年海外協力隊が語る派遣国の魅力～」を開催しました。

今回は2012年から2年間、バヌアツ共和国にて小学校教師として現地の小学校に赴任した青山翔さんあおやま しょうにお話を伺いました。



講師の青山さん。バヌアツ共和国や協力隊としての活動のことなど、楽しくかつ丁寧に伝えてくださいました。

バヌアツ共和国は南太平洋上に南北に広がる80以上の島々からなる共和制国家です。温暖な気候と肥沃な土地に恵まれ「世界一幸せな国」と呼ばれています。青山さんは、このバヌアツ共和国の島のひとつマレクラ島に滞在しました。

バヌアツ共和国のこと、現地での生活や協力隊としての活動のことなどについて、写真と動画とともに紹

介していただきました。参加者との対話も交えながら会は進み、バヌアツ共和国への理解をより深めることができました。「イストレットノモ」(なんとかなるさ)の精神からくる、バヌアツの人々の温かさや大らかさを感じられる会となりました。

(国際交流・協力課)

「姉妹・友好都市の日」記念イベントで活躍 ヒロシマ・メッセンジャー決定

広島市は毎年、海外の6姉妹・友好都市ごとに各2人、計12人を「ヒロシマ・メッセンジャー」として委嘱しています。

メッセンジャーは、「姉妹・友好都市の日」記念イベントの企画・立案への参画、司会進行を行うなど、姉妹・友好都市について市民の理解を深める活動に携わります。

【活動依頼期間 2020年1月1日～12月31日】

ホノルル市	ふじた 泓田 しのぶ	たつさき 辰崎 裕美子
ボルゴグラード市	せとう 瀨藤 洋子	はしむら 橋村 ますみ
ハノーバー市	ナターリア・ガリヤーシ	かなざわ 金澤 守真
重慶市	しみず 清水 まさひろ 仁裕	しゅう 周 じえ
大邱広域市	かみのぶ 神信 みつき 充希	イ 李 スンフン 承勲
モントリオール市	いむら 井村 まい 麻衣	はしもと しょうこ 橋本 翔子

(国際交流・協力課)

多言語の生活情報サイト「外国人市民のみなさんへ」を 7言語で作成・公開しました (URL: <https://h-ircd.jp/guide.html>)

国が昨年4月に新しい在留資格を創設したことにより、広島市も外国人市民がさらに増加することが見込まれます。このため、外国人市民が広島市で暮らすうえでの生活情報等を分かりやすく掲載したウェブサイト「外国人市民のみなさんへ」(7言語)を作成し、本財団国際交流・協力課ホームページのリニューアルにあわせて、このたび公開しました。

【拡充内容】

1 トップページ

生活情報等にアクセスしやすいように項目ごとに分類し、ピクトグラム(絵文字)を使ってシンプルなデザインに

2 言語数

日本語、英語、中国語、スペイン語、ポルトガル語、ハンゲル、ベトナム語の7か国語 (3月末までに、フィリピン語を追加)

3 緊急情報とお知らせの掲載

トップページに、緊急情報とお知らせの一覧を掲載

4 質問フォームの設置

メールで簡単に質問、相談ができるように、各言語の広島市外国人市民の生活相談コーナーのページに、質問フォームを設置

5 よくある質問を新たに掲載

広島市外国人市民の生活相談コーナーに多く寄せられる質問を掲載

【お問い合わせ】 国際交流・協力課 / TEL (082) 242 - 8879



ベトナム語のトップページ